学会企画シンポジウム 5

通常の学級に在籍する発達障害児の理解と支援

――自他理解の発達をふまえて――

企画・司会：別府 哲（岐阜大学）
企画：谷口明子（東洋大学）
企画・指定討論：米田英嗣（青山学院大学）
話題提供：藤野 博♯（東京学芸大学）
　　自閉スペクトラム症児の自他理解の発達と支援
話題提供：森村美和子♯（東京都狛江市立狛江第三小学校）
　　発達障害児の当事者研究の実践―通常の学級との連携を踏まえて
話題提供：古村真帆（神戸大学）
　　通常学級の児童は発達障害児の個別支援をどうとらえるのか

企画趣旨：

2022 年度末文科省は，通常学級（小学校）に在籍する発達障害児の推定値を 8.8%と公表した。発達障害児だけに限らず，特別な教育的ニーズ（Special Needs for Education; SNE）を有する子どもは通常学級に数多く存在し，その支援は教育現場において喫緊の課題となっている。今回はそれを，自他理解の発達との関連で検討する。一つは発達障害児自身の自他理解の発達とその支援についてである。知的に遅れの無い自閉スペクトラム症児の二次障害は，周囲の無理解とそれを理解できる本人の発達（9 歳すぎに心の理論を獲得すること）が，その一つの要因となることが指摘されている。AD/HD や限局性学習症においても，9,10 歳を超えることによる自他理解の発達が，障害や自己の理解を変化させるといわれる。自他理解の発達を踏まえた支援が必要となる。二つは，障害を持たない子ども自身の発達である。通常学級での支援は教師の個別支援にとどまらず，通常学級の子ども集団が発達障害児をどう理解し関わるかが重要となる。障害を持たない子も 9,10 歳の節で自他理解が変化し，それは発達障害児の理解や関わり方にも影響を及ぼす。それを踏まえた障害を持たない子への支援の在り方の検討は必要不可欠である。今回は，発達障害児と障害の無い子どもの自他理解の発達をもとに，通常学級における発達障害児の支援の在り方について検討することとしたい。